



細身の影が、ゆっくり九十九の左へ回り込んでゆく。
猫科の猛獣が獲物の値踏みをする時のように、しなやかな弧を描いて歩く。
足音は聞こえない。

九十九は最初の位置から動かない。
堀川の動きに合わせて首だけを巡らす。
両手は身体の脇へだらりと垂らしていた。

九十九の視界一杯まで回り込んだ堀川が更に一步を踏みだそうとした時、不意に九十九が口を開いた。

「ああ～あ、そうか！」
「？」

堀川の足が止まった。

「驚きましたよ。弟さんのお見舞いに行く途中だったんですね」

身体の向きを変え堀川に正対した九十九は、先程までの表情が嘘のように満面の笑みを浮かべていた。

「いやあ、殉君から色々とおっかない人だって聞いてたもんで、緊張しちゃいましたよ」

頭を掻きながら無造作に堀川に歩み寄った。

すっと三步の距離を下がった堀川の細い目が見開かれていた。

「おや？ どうしました」
「…その歩法、見た事がある…」
「はあ？ 何のことでしょう」

尚も近寄ろうとする九十九を鈍色の切っ先が制した。
堀川の手には巨大なククリナイフが握られていた。

「動くな。間合いを盗んだな、真山の奴とそっくりだ。あいつと知り合いか？」
「さて、何のことやら」
「とぼけるなよ。奴の技はよく知ってる。構え。身のこなし。今見せた歩法。そっくりだ」
「…」
「どうやら、思わぬ所でいい獲物に会えたようだな」

九十九はまだ微笑んでいた。
堀川が音も無く斬撃の間合いに迫ろうとした、その時。

突然、眼の前に乱舞した無数の白い影をククリナイフで薙ぎ払った堀川の前には誰も居なかった。

後ろを振り返ると、スーツケースをひっ担いだ九十九が脱兎のごとく走り去る姿があった。
もうかなりの距離を走っている。

走りながら、片方の手をひらひらと振っていた。

さいならあ～
またこんどお～

遠くなる声に舌打ちをし、堀川はナイフを背の鞆に収め道に散らばった紙片を拾った。
歓楽街に貼ってあるキャバクラやらの電話番号が書かれた紙を、顔をしかめて握りつぶす。

「とぼけた野郎だ」

東京での楽しみが増えたなと呟いた堀川は、ゆっくりと坂を登り始めた。

◇

殉は杖を突きながら玄関を出た。

真山から荒れ狂った加夏子の様子を聞かされ、矢も盾もたまらず病室を抜け出したのだった。

碧の部屋にも、ヨシオというあの大男の部屋にも彼女の姿はなかった。

外へと出てはみたものの、こんな勝手の判らない所で加夏子の行きそうな場所の見当などつきようもなかった。

あてどなく勘を働かせても、捜す相手が見つかる筈もない。

途方にくれて歩いたその先に芝の感触があった。こんもり盛り上がった向こうは、坂の下へと続いているようだった。

殉は真っ直ぐに歩いていった。

◇

夕暮れ。

赤が黒に飲み込まれようとするそのあわいに、膝を抱えた加夏子が座り込んでいた。

気配が伝わってくる。

加夏子を心の牢獄から救い出した時。

あの時も彼女は、今と同じようにうずくまっていた。

奇妙な感覚を覚えながら、殉は加夏子の背後に歩み寄っていった。

「カナ…」

「…」

「碧ちゃん、少し落ち着いたみたいだよ。何とか持ち直してくれるかもって、お医者さんも言った」

「…」

「大丈夫だよ。あの娘、強いコだもん。このままどうにかなっちゃう訳なんかないよ」

「…わたし…」

「ん？」

「わかる。衣笠さんの気持ち、すっごく判るの。わたしだって…殉を助ける為だったら、衣笠さんとおんなじこと、してたと思う…」

殉は答えなかった。

「でも…でも駄目！ 許せない！ 自分が苦しんだり苦労するならいい！ でも碧ちゃんはなんにも関係ないんだよ！ ただ殉とおんなじ力をもってるってだけだよ！ こんな目にあう理由なんてないじゃん！！ そんなの、誰かの勝手な理由じゃん！！ そんなのってワタシ！…わたし…駄目だよお…」

自分でも何を言っているか判らなくなっている加夏子の肩を、隣りに腰を降ろした殉が深く抱き込んだ。

「誰にも、どうしようもなかったんだよ。みんながみんな良かれと思って動いてた。僕たちはたぶん、それに立ち会っただけなんだよ」

「じゅん…」

加夏子が幼子のように殉に抱きついた。

その時だった。

「殉」

「にいさん」

殉の腕の中で、崩れ落ちそうだった加夏子の気配が氷のように堅くなった。

あなた…あのときの…

全身を硬直させている加夏子の隣りで、殉もまた言葉を凍りつかせていた。

「兄さん…なんで…」

問いに答えず、無表情なまま堀川は二人に歩み寄ってきた。

加夏子がいやいやをするように首を振り、座ったまま後ずさりを始めた。がばと立ち上がり、走って逃げ出そうとする。

「動くな」

威圧的でもなく、大声でもない堀川のひとことで加夏子の足が止まった。走りだそうとした時の姿勢のまま、ぎくしゃくと首を回し後ろを見る。

堀川は夕日を背に、ただうっすらと立っていた。

「座れ。殉もいるだろう」

殉もいるというその言葉が加夏子の衝動を抑えた。腰を抜かすように、彼女はその場にへたり込んだ。

「どうしてここにきたの兄さん?! こんな事しちゃあ…」

「知ってるんだろ。何もかも」

殉を見る加夏子の目が張り裂けんばかりに見開かれた。

「…信じたくなかった…」

殉の声は沈みきっていた。

二人の前まで来ると、堀川は片膝をついて屈み込み二つの顔を交互に眺めた。

「清水 加夏子」

「…」

「二年前、お前を斬ったのは、おれだ」

「……」

「お前と殉が…皮肉だな」

……

「やっぱり、そうだったんだ」

こわばった表情のまま、加夏子が口を開いた。

「いつ? いつからなの、殉」

「碧ちゃんのいた、あの小屋で。真山さんは本気で衣笠さんを殴り殺そうとしてた。止めに入る直前に聞こえたんだ、もの凄い、けだもののような『声』が。そして…」

見えたんだ

真山さんが見たもの

背中から斬られた、カナ

倒れ込む君の隣りを駆け抜けた影

一瞬の横顔

兄さん、あなただった

殉が重い視線を兄へ振り向けた。

「僕を見送りに駅へ来た時。あの時から感じていたよ。兄さんも気が付いたんだよね、あの時。自分が傷つけたのがカナだったって」

「…詫びは言わん。あれは仕事だった。それだけだ」

「それだけ？ それだけですって！？ 自分が何したかわかってるの！ アタシ死ぬところだった！ 口も利けなくなった！ 歩けなくなった！ みんなアナタのせいよっ！！」

「だが死んじゃいない。死ぬように斬ってもいない。死ぬのはお前じゃない、清水 加夏子」

死ぬのは…

堀川の声は重かった。